

《黒人女性への暴行》の過去、現在、そして未来

Joanna Woodall, *The past, present and future of “Le Rapt de la Négrresse”*

本講演では、今日の知名度こそ低いものの、オランダのエリート画家だったクリスティアーン・ファン・カウエンベルフ（1604-1667年）の非常に特異な油彩画を取り上げる。本作は1970年にヨーロッパの美術市場に姿を現し、現在は《黒人女性への暴行（*Le Rapt de la Négresse*）》というタイトルで、フランスのストラスブール美術館に所蔵されている。作者のモノグラムと1632年という制作年代以外、本作について知られていることはほとんどない。本作の主題は謎めいていて不快なものである。アフリカ出身の女性が2人の白人男性からの性的暴行に抗い、それを傍観するもう1人の男もいる。長らく等閑視されてきたが、現在この絵画は、無力な女性に対する暴力によっていっそう強調された、あからさまで悪意に満ちた人種差別の例と見なされている。2020年に起こった全世界的な「ブラック・ライブズ・マター」運動をうけ、本作は人々の心情に配慮し、展示室から美術館の収蔵庫へと移された。もはや展示の予定はなく、こうした作品は破壊されるべきなのではないかとする人さえいる。しかしこの作品の画像が今なおインターネット上で流通していることから、本作が人々の関心や批判的な反応を喚起しつつ—そのなかには現代美術作家たちの作品も含まれる—象徴的に強力に生き続けているということが窺える。

今回の講演では、このような作品と直面した際の、美術史家の役割と責任について考えたい。我々はこうしたものを、ただ無視することしかできないのだろうか。あるいはその攻撃性に眉をひそめて、美術館の収蔵庫や、現在とは隔絶された蒙昧な過去へと閉ざすしかないのだろうか。本作が生まれた歴史的状況や当時の鑑賞者たちの反応を理解することは、必然的に、主題のおぞましさを相対化し、説明して片付けることになってしまうのだろうか。それとも、美術史は、このような絵画が（少なくともある人々にとっては）容認されるものだった歴史的過去と、構造的な女性嫌悪や人種差別をあばき、それに抵抗し始めた現在とをつなぐことができるのだろうか。肝要なのは、美術史という営みが如何にして、より包括的で平等主義的な未来—ダイバーシティが重視され、祝福されるような未来—の構築を促せるような仕方で、本作の物語を語りうるかということである。本講演では、このケーススタディを用いつつ、美術史の倫理、方法論そして語りに関するより全般的な問いを提示したい。